



TITLE:

<學界展望>秦漢時代史に関する二 ・ 三の問題

AUTHOR(S):

永田, 英正

CITATION:

永田, 英正. <學界展望>秦漢時代史に関する二・三の問題. 東洋史研究
1959, 18(1): 79-85

ISSUE DATE:

1959-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148132>

RIGHT:

秦漢時代史に關する二・三の問題

近年この時代の研究は非常に活潑となり、研究自体も精密且つ多方面に及んでいる。たとえばまとまつた論文集をあげてみても秦代に關係のあるものとしては、中國古代史研究會が、先の「中國古代史の諸問題」について發刊した「中國古代の社會と文化」（東京大學出版會刊、一九五七）があり、漢代に入ると、漢代史研究特集號として編集された「東洋史研究」一四一一・二合刊號（一九五五）、同じく「東方學報」京都二七（一九五七）等がある。これからしてもこの時代の研究の盛んな様と、またそれが中國史全体に占める比重の大きさを如實に示すものといつて過言ではなからう。このような最近の研究を廣く展望するということは、私の力を以てしては到底なし難い仕事であり、また個々の研究については、既に各誌において紹介・書評もなされているので、ここに重ねて述べる必要もないであらう。そこで本稿では、秦漢帝國の歴史的性格の問題に關連して、政治・社會・經濟史を中心に最近の研究の中でも特に問題となつてゐる點をとりあげて考えてみたいと思う。従つて觸れ得る研究も極く限られたものになることを、豫めお詫びしなければならぬ。

嘗て西嶋定生氏が「中國古代帝國の一考察——漢の高祖とその功臣」（歴史學研究一四一、一九五〇）などで、民間から擧兵した漢の高祖集團を以てそれが家父長制的家内奴隸所有者たる豪族の構造を

もつたものとしてとらえ、漢帝國の構造或は性格もその擴展にほかならぬと提言して以來、秦漢帝國の歴史的性格を解明することが、この時代の研究の大きな課題となつてゐる。この西嶋氏の提言に對する批判は凡そ次の二つに分けることが出来るであらう。その一つは、西嶋氏の体系の基礎をなす氏の高祖集團の分析、或は國家權力の問題に向けられたものである。それは、高祖集團の家父長的支配關係を内面から支えているものとしてパーソナルな任俠的精神を問題とし、漢代における人的結合は、この任俠という民間秩序を紐帶として始めて可能であると指摘した増淵龍夫氏（「漢代における民間秩序の構造と任俠的習俗」一橋論叢二六・五、一九五二）、或は西嶋氏の立論の史料の根據を實證的に批判し、高祖集團は家父長的奴隸所有者としての豪族概念とは必ずしも一致しないとして、集團内部の對等性を強調した守屋美都雄氏（「漢の高祖集團の性格について」歴史學研究一五八・九、一九五二）などであるが、この兩氏は、更に進んで國家權力の問題をとりあげ、近年注目すべき見解を發表している。先づ増淵龍夫「戰國秦漢時代の集團の『約』について」（東方學論集三、一九五五）、同「戰國官僚の一性格——郎官と舍人」（社會經濟史學二一・三、一九五五）では、集團を内面的に支える任俠的精神とは對立しながらも、同時に集團を外形的に規制することによつてそれを支えるところの「約（束）」という規約の存在と、この「約」のもつ権力的性格とを追求し、任俠的紐帶によつて結合する集團が、何故集團として家父長的な權力構造になり得たかを明らかにする一方、更にかかる集團を現實の歴史の中に追求することによつて、秦漢集權的官僚制國家の歴史的性格を家父長的なものと規定した。増淵氏が、このように高祖集團内におけるパーソナルなも

のとパトリアルカルなものとの並存を説くのに對し、高祖の統一後には、このパーソナルなものが次第に消滅していったと考えるのが守屋美都雄「父老」(東洋史研究一四・一二)である。氏は、舊來の地縁の協同体である里の指導者、すなわち父老に注目し、高祖の所謂パーソナルな對等的集團が皇帝としての絕對的支配權を勝ち得るためには、この父老によつて承認され、父老の指導する里をその權力構造内に組織化することによつて始めて可能であつたとし、漢の國家權力の基礎を地縁の協同体である里の上に求めようとしたのである。この場合問題となるのは里そのものの性格とか實態であるが、それについては後で觸れる。

以上のような増淵・守屋兩氏の批判とは別に、西嶋氏が家父長的家内奴隸所有者として規定した漢代豪族の大土地所有とその生産關係が、その經營形態からみて果して奴隸制と云いうるかどうかという批判を提起したのが宇都宮清吉「僮約研究」である。氏は、奴隸經營と小作經營との比較のもとに、漢代でも小作經營は有利であり、小作制は圧倒的に優勢だつたことを強調し、豪族の大土地所有を支える基本的な生産關係は小作制にもとづく莊園經營であつて、奴隸はこの生産關係の中から生み出される副産物にはかならず、漢代社會を性格づける本質的な存在ではなかつたとしたのである。この西嶋・宇都宮兩氏に端を發する漢代奴隸制論、小作制論の問題は、また學界における論争の一つの中心となつてゐる。以來、たとえば、漢代の公田經營の分析を通して土地所有制の問題とし、公田經營並に大土地經營における小作制は奴隸制の中から展開されたものであり、小作制こそが副産物であるとする河地重造氏(漢代の土地所有制について)「經濟學年報五、一九五五」、奴隸制か小作制かという

大土地所有の生産關係を基準とする諸説に對して、問題の規準をこの二者より量的にはるかに多い一般農民層に求めねばならぬとし、彼等を最高の土地所有者である國家の農奴或は隸農と考え、この國家對農民の關係の變化の中から問題解決に進む必要性を提言する濱口重國氏(中國史上の古代社會問題に關する覺書)山梨大學學藝學部研究報告四、一九五三)、或は公田假作者の種々な形と國家の収奪形態の考察から、公田假作農民を直ちに奴隸的・もしくは農奴的・コ罗纳ーテス的と、規定することの危険性を力説する五井直弘氏(漢代の公田における假作について)「歷史學研究二二〇、一九五八」等々の論考を生んでゐる。

以上の諸研究は全て分期論に關連するものであつて、これについては天野元之助氏(中國古代史家の諸説を評す)「歷史學研究一八〇、一九五五」、増淵龍夫氏(古代帝國の成立とその歴史的 성격)「有斐閣刊」戦後における社會經濟史學の發達」所収、一九五五)などの有意義な批評・展望をはじめとして、西嶋氏の、同氏に對する前記増淵・守屋兩氏の批判をもふまえて、中國古代史の問題點を指摘するという形で發表された「中國古代社會の構造的性質に關する問題點」、或はそれを収録せる「中國史の時代區分」(東京大學出版會刊、一九五七)があり、更に後者については、宮崎市定氏「歷史學研究二二四、一九五七」、内藤戊申氏(史林四一一、一九五八)などの書評や展望もあるので、それらにゆづることにはない。ただ嘗て増淵氏が、西嶋氏の提言に對する批判を整理し、殘された問題點は「國家的土地所有を思はせる程の漢帝國の一方的支配の制度的關聯の中から、それを崩壊にみちびく様な矛盾の要因が生れて來るその具體的關係を、どう体系的に組立て理解すべきかということであり、

その矛盾の基本的關係を、國家權力、豪族、小農民、小作奴隸の四者の相互に關聯する複雑な關係の中で、どう正しく把握するかというところにある」(同「古代帝國の成立とその歴史的性格」としているが、現在も尙今後の問題として殘されている。

ところで、以上のような秦漢帝國の歴史的性格とか國家權力といった問題を究明する時、そこにはやはり史料的な制約もあつて、制度史的研究が一層重要となつて来る。以下、この制度史的研究の中で注目すべき論考をひろうと、先ず漢代の政治組織に關聯して列侯封建の状態を追求した布目潮瀨「前漢侯國考」(東洋史研究一三一五、一九五五)がある。氏は、列侯封邑の戸數と封ぜられた縣(侯國)の戸數との間に相當の差違があることから、縣に封ぜられても一縣全体を封邑としたものではなく、また侯國の相は單に名目のみで、實質は縣の令長とかわりがなかつたことを明らかにした。漢代封建制の實態並に封建制と郡縣制との關聯を考える上に重要な指摘である。

また漢代地方行政の末端組織である鄉亭里を扱つたものに日比野丈夫「鄉亭里についての研究」(東洋史研究一四一・一二)、宮崎市定「中國における聚落形態の變遷について——邑・國と郡・亭と村とに對する考察」(大谷史學六、一九五七)がある。日比野氏は、里は漢代の地方制度の一連としてみるかぎり人爲的に編成されたある戸數の組み合せであつたとし、里は戶籍、亭部は地籍編成の單位で、いくつかの亭部が集つて郷をなし、その中に含まれる人戸が適宜に分けられて里となつたと推測した。この場合、氏は、かかる里が城内と城外の二通りあることを指摘したのであるが、これを更に發展せしめて、里は城内の里を指すものと斷じたのが宮崎氏の論考である。氏は先秦より六朝に至るまでの廣い視野から聚落をとりあげ

るとともに、中國古代は都市國家であつたという前提から出發し、縣・鄉・聚・亭といわれるものもこの都市國家の系統をひくものでそれは何れも大小の城郭をもつた同性質の聚落だとし、その場合、里はそれら城郭をもつた聚落中にある民居の區劃であるとした。そして、この時代の聚落は恰も細胞のようなもので、漢代地方制度の實態はかかる「大小の細胞の集合体」にほかならず、従つてこの上に成立する漢代官僚制は「大小長官の集合」した未熟なものに過ぎなかつたと結論して、漢代官僚制をとかく完備したものとして受けとりやすい從來の考えに強い反省を促している。日比野・宮崎兩氏とも、里を以て自然聚落とする從來の説を否定した點、注目しなければならぬ。抑も、里を自然聚落とするのは故岡崎文夫氏以來の説であるが、これには尙疑問がある。たとえば、左傳、戰國策などに既に里が見えていることからして、當時にも里があつたことを知るが、一方史記商君列傳には商鞅が聚落を統合したことを記して「小都鄉邑聚を集めて縣をつくる」(秦本紀もほぼ同文)とある。若し里が自然聚落であつたとすれば、鄉邑聚と同様に當然その對象になつた筈である。しかるに里については一言も觸れていない。これなどは、里が自然聚落でないことを暗示する一つの史料ではなからうか。また日比野氏は父老について、「人爲的につくられた里内の人心は一般に冷酷で、什伍の組織にしばらく、父老というものはあつても名のみで、實は縣、鄉の吏の單なる代辯者であつたかも知れぬ」としているが、この點前記守屋氏の論考「父老」における見解とどの様に關聯するかが問題とならう。今後、鄉、亭或は里の内部組織の實態とともに、父老の性格とか實態の究明が要請されるが、ともかく日比野・宮崎兩氏の論考は、今後賛否兩論に分かれて大いに問題

になるものと期待される。

ところで、郡縣制或はその末端組織によつて、帝國を支えるあらゆる生産人口は把握、強化されたのであるが、その具体的關係は徭役・賦税制の中にもみることが出来る。先ず徭役については、米田賢次郎「漢代徭役日數に關する一試論」特に『三十倍於古』について（東方學報、京都二七）がある。漢代の徭役日數は儒家の思想にもとづいて制定されたものであり、それは最大限冬季の閑期九十日（三ヶ月）で、内容は地方力役三十日、兵役三十日、邊境力役三十日であつたとみるのがその論旨である。氏のように、何らかの思想的うらづけのもとに具体的制度を究明する方法は、方法として非常に興味あるものであり、附記において士と卒との身分上の資格に明らかな區別があつたという指摘とともに、今後の研究が期待されるであらう。賦税に關しては、平中岑次「漢代の馬口錢と口錢に就いて」（東方學報、京都二七）がある。ここでは馬口錢を究明する上から漢代未成丁の人頭税たる口賦に論及し、武帝の時、口賦三錢の追加が行われたとする舊來の通説に對して、それは漢初以來二十三錢であつたことを推論したものである。緻密な考證と批判の上に立つ氏の推論には敬服するものであるが、しかし數ヶ所に亘つて文字を修正する點に、少し無理があるように思われる。やはりこの口賦の問題を解明するには、嘗て宮崎市定氏が「中國古代では賦と税の區別があり、この區別は前漢時代に尙明白であつた」（同「古代中國賦税制度」とした、この觀點から更に掘りさげてみる必要があると思う。今後、口賦も含めて漢代の人頭税問題を場合、何故それが漢以後に消滅したのか。また税制上、系譜的に辿り得るならば、後世のそれとどのように關聯するかが解明されねばならぬ。

ところで、種々な制度的關聯のもとに人民を掌握し、それを重要な基盤として成立していた漢帝國であれば、人民は全て等しい帝王の良民であり、編戶の民であつた筈である。しかるに現實の彼等の間には、帝國の支配体制を動搖せしめ、やがてはその統一を崩壞に導く多くの政治・社會・經濟的矛盾が既に着々と形成されつあつた。かかる矛盾を國家對家族の面からとりあげ、多年に亘つて家族問題を究明して來た宇都宮清吉氏の一連の研究が、「漢代社會經濟史研究」（弘文堂刊、一九五五）として發刊された。同書には前記「僅約研究」のほか、後漢王朝を樹立した南陽劉氏の性格を、南陽地方の經濟的發展と南陽豪族社會の中で明らかにし、劉秀の社會的經濟的基礎を具体的に分析した「劉秀と南陽」、また漢代豪族の大土地所有と土地兼併がどのような社會的經濟的環境の中で激化していつたかを問題とした「史記貨殖列傳研究」等々の諸論文を改訂收録したもので、この書の漢代史研究に貢獻するところは極めて大きいものがある。尙これについては、平中岑次（立命館文學一二四、一九五五）、五井直弘（歷史學研究一八五、一九五五）、河地重造（東洋史研究一四一三、一九五五）などの諸氏の批評がある。

このほか、後漢末の五斗米道、太平道といった民間宗教の歴史的性格を追求した大淵忍爾「中國における民族的宗教の成立」（歷史學研究一七九、一八一、一九五五）は、後漢の農民叛亂或は更に漢代における里の變貌にふれている點、興味ある論考であり、經濟史關係の宮崎市定「史記貨殖傳物價考證」（京都大學文學部五十周年記念論集、一九五六）は、史記貨殖傳中の物價の記事を手がかりとして當時の物價を考證したものであるが、難解な古典の本文も、よむ人の獨創と考え方によつて十分生かし得ることを證明した點、注目す

べき論考である。

ところで、この秦漢帝國の歴史的性格を、その形成期にまでさかのぼって追求しようとする立場から、先ず解明しなければならぬ重要問題の一つに商鞅の變法がある。この問題は、従来多くの研究者によつてとりあげられてきたにも拘らず、史料的な制約、或はそこから引出される問題の重要性などもあつて、尙多くの疑問を残していた。しかし近年、これらの制約を克服し、商鞅變法の問題解決の上にすぐれた論考をもち得たことは誠に幸であつた。中でも、嘗つて平中苓次氏が「秦代土地制度の一考察―名田宅について―」（立命館文學七九、一九五一）において、商鞅の變法の一項たる「開阡陌」は土地課税均一化のための數量的區劃整理であり、それは軍功・爵位を基準として田宅・臣妾・衣服を歸屬（＝保有せしめる）制度に連るものと考え、かかる爵制の大土地保有の創始は人民相互間に私的大土地所有を促したとして、秦の爵制の大土地保有と漢代以後の大土地私有、兼併との間に密接な關聯性を認めようとした。この平中氏の論文が發表されるに及んで、商鞅の變法は再び古代史學界の中にクローズ・アップされるに至つた。その點からいつても氏の論文のもつ意義は誠に大きいものがある。ところでこの平中氏の見解に對する批判が、最近増淵龍夫、守屋美都雄の兩氏から提出されている。先ず増淵龍夫「商鞅變法の一問題」（野村博士還曆記念論文集「封建制と資本制」所収、一九五六）では、荀子議兵篇にみえる爵制的土地所有を、隸農支配にもとづく知行地であるとする平中氏の見解が、商鞅の意圖した君權強化の方向と矛盾するという批判から出發する。そこで有爵者に附與された土地は食邑の性格をもつたものと

して考え、荀子議兵篇の「五甲首にして五家を隸せしむ」の五家は、土地に附隨し有爵者に隸屬する隸農ではなくて、商君書にみえる庶子使役のことであらうとし、商鞅は原則として人民相互の支配關係を禁止したが、ただ軍功ある有爵者のみに人數、期限、など一定の條件のもとに庶子を使役することが許されたと考えた。有爵者の庶子使役に際し、國家權力による強い制約があつたことを指摘した注目すべき論考であるが、しかし有爵者が食邑をもつたと考える點、庶子とその食邑内の耕作民の家から徴せられたとする點に尙問題を残していた。これに對して、平中氏の所謂米地説を全く否定したのが守屋氏である。氏は先年、商鞅の「開阡陌」に關する問題點を整理した「阡陌制度に關する諸研究について」（『中國古代史の諸問題』所収、一九五四）について、「開阡陌」は秦の支配の貫徹、未開墾地開發の二大目的を以て行われた、縣の編成の具体的手段としての土地區劃で、これにより大族の分解、小農民の所有地確保、爵に伴つて給付される土地供給源の成立をみたとする「開阡陌」の一解釋」（『中國古代の社會と文化』所収）、或は荀子議兵篇の「功と賞とは並行的に大きくなつてゆく」という解釋を前提として、「五家を隸せしむ」の五家は、商君書境內篇にみえる隸僕・臣妾に當る奴隸であり、また庶子も使役僅かな自營農民で、有爵者の良民支配は皆無ではなかつたが極めて大きな制約があつたとして、前記平中、増淵兩氏の説を批判した「秦の軍功褒賞制における人的支配の問題について」（『社會經濟史學』二二一、一九五七）などを發表し、更にこれらの見解を、商鞅の爵制を通して統一的に把握しようとしたのが、「漢代爵制の源流として見たる商鞅爵制の研究」（『東方學報』京都二七）である。ここでは先ず問題の多い商君書境內篇を綿密に考證し

てその資料的價値を決定し、そこから商鞅の爵制を論述した。そして、入粟帛に比し軍功による受爵の方が容易であつたことから軍爵について論じ、下級爵は官職分化、上級爵は未分化であつた點、爵に附隨する賞賜としての田宅は舊來の士大夫の采地の如きものではなく、耕地と宅地そのもので、爵の授與と田宅の授與とは系統を異にする褒賞であつた點、また商鞅の爵が世襲ではなかつた點などを考察し、商鞅の爵制は周代のそれとは歴史的意義が正反對で、漢爵に連るものであると結論した。守屋氏の相互に關聯する諸論文は、舊來の氏族制的秩序にもとづく邑制國家組織の崩壞のあとをうけて、新たに形成されていく集權的統一支配の端緒を開く商鞅の變法改革に鋭いメスを入れ、しかも彼の改革が、それに先行しそれに續く歴史的展開の中で、どのような歴史的性格をもつたものであつたかを究明した極めて注目すべき研究である。氏の周到緻密な所論には間然する所がないが、敢て疑問を出せば、それはやはり氏が重要な資料としてとりあげた商君書に對する疑問である。たとえば境内篇にみえる爵、就中爵名などを全て商鞅の制定したものとするには餘りにも完成しすぎた感が深い。思うに、諸子を資料として古代の政治社會、經濟史を論ずることは非常に困難であり危険である。それは内容的にいつて、實際に行われたことと、またそのことが實際には行われず、單に思想として止つてゐるものとを混合してゐるのみでなく、商君書の如きその制作年代の確定してゐないものがあるからである。これを正しく理解するためには、やはり當時（戰國）の社會全般からの、より一層廣い視野からの考察が必要となるであらう。

このほか秦の社會經濟史を扱つたものに、増淵龍夫「先秦時代の山林藪澤と秦の公田」（『中國古代の社會と文化』所収）がある。專

制君主權の典型的に發達した秦において、公田は如何なる意味と役割をもつたか。すなわち中央集權化の推進力となる經濟的基盤を公田に求める立場から、戰國諸侯の山林藪澤の圍い込み、獨占、開發の状態を追求し、君主の公田成立と專制君主權の強化を推測した力作で、前記守屋氏の論考とともに學界における活潑な議論の中心になるものと期待される。

以上のほかにも本稿で當然とりあげるべき多くの論文があるが、それらを脱落させ、學界展望という課題からはずれてしまつた。諸家の貴重な研究に對して無難不當な紹介と批評を行つた非禮とともに、深くお詫びする次第である。尙中國の研究論文については全く觸れなかつたが、これはまた別の機會に譲ることにし、最後に若干の最近の論文名（單行本）を附して筆をおく。

范文瀾 中國通史簡編 修訂本第二編 一九五八

歷史研究編 中國古代史分期問題討論集 一九五六

山東大學文史哲編 中國古史分期問題論叢 一九五七

王仲聲 關於中國奴隸社會的瓦解及封建關係的形成問題 一九五七

中國人民大學編 中國奴隸制經濟形態的片斷探討 一九五八

歷史研究編 中國歷代土地制度問題討論集 一九五六

賀昌羣 論兩漢土地佔有形態的發展 一九五六

漢唐間封建的國有土地制與均田制 一九五八

李劍農 先秦兩漢經濟史稿
陳直 兩漢經濟史料論叢

一九五七
一九五八

(永田英正)

楊希枚氏の「先秦賜姓制度理論的商榷」等を読み

——西周春秋史研究の一面——

楊氏の賜姓に關する研究は、『姓』字古義析證(中央研究院歷史語言研究所集刊第二十三本、一九五二)、左傳『因生以賜姓』解與『無駭卒』故事的分析(中央研究院院刊第一輯、一九五四)、及び先秦賜姓制度理論的商榷(歷史語言研究所集刊第二十六本、一九五五)からなり、これらと關聯して先秦諸侯受降獻捷與遺俘制度考(同集刊第二十七本、一九五六)、聯名與姓氏制度的研究(同集刊第二十八本、一九五七)の論考が發表されている。これらのすべてについて紹介することは紙幅の都合上不可能であるので、ここでははじめの三つの論文に重點をおいて述べる。

左傳隱公八年の條に、

無駭卒。羽父請諡與族。公問族於衆仲。衆仲對曰。天子建德。因生以賜姓。昨之土。而命之氏。諸侯以字爲諡。因以爲族。官有世功。則有官族。邑亦如之。公命以字爲展氏。

とある。この衆仲の答えにある因生以賜姓の意味は、杜預以來、姓名を與える、即ち出自によつて姓名を名のことを許す意味にとられている。同じような例は、左傳昭公八年の「及(陳)胡公不淫、故周賜之姓」にもある。このような場合、漢高祖が、項伯や婁敬に劉氏の姓を名のせたと同じように考えることが出来るのであろうか。

高祖の場合は、劉氏を名のらせることによつて、その寵遇を示し、漢室に對する忠誠をより確かなものにしようとしたわけである。然し先秦の古文獻にある賜姓は如何、例えば國語楚語下にある

(昭)王曰、所謂百姓千品萬官億醜兆民經入咳數者、何也。(觀射父)對曰、民之微官百、王公之子弟之質、能言能聽微其官者、而物賜之姓、以監其官、是爲百姓。——以下略——

の物賜之姓を、韋昭は「以功事賜之姓」と解し、やはり姓名を與えることとしているが、この場合は、王公の子弟は、王公の姓とは別の姓を稱することになる。従つてこの賜姓を漢代の賜姓と同じように考えるのが、果して妥當なのであろうか。楊氏の賜姓に關する研究は、ここに出發點があつたと考えられる。従つて先ず第一に先秦の書物にあらわれる姓字の意義を考える必要がある。

楊氏によると、姓字の古義は、三つに分けられる。即ち1子或いは子嗣の意、2族或いは族屬、3民或いは屬民の三義である。1の場合にはまた子姓と熟して使用され、また禮記曲禮の「納女於天子、曰備百姓」の如く、多くの子供の意味を百姓と稱する。また甲骨文の求生、金文善鼎に宗子と對舉される百生の如く、姓字は生とも書かれる。2は、例えば左傳定公四年の條に魯公・康叔に分與された殷民六族・殷民七族に對して、唐叔に與えられた懷姓九宗の如き場合で、また左傳昭公三十年の「我盍姑億吾鬼神、而寧吾族姓」の如く族姓と熟語される。3の民の意味では、國語周語「司商協民姓」の如く熟されたたり、或いは百姓・群姓・萬姓と稱しても使用される。ただこのような分類は楊氏も言う如く絕對的ではなく、特に2の族の場合の内含する意味は、第一或いは第三の意味に近い場合が多い。左傳昭公三十年の族姓の如きは子或いは子姓の意味の姓に近い